



佐津川 愛美 様（俳優）

今回のショートフィルムコンテストには、年齢や経験の異なる制作者それぞれの「今」が素直に映し出されていました。限られた尺の中で、何を描き、何を描かないか。その取捨選択には、作り手自身の心の中が表れており、作品ひとつひとつにしっかりと向き合いながら拝見させていただきました。

静岡大賞を受賞された『池田君とぼく』は、懐かしさや人を想う気持ち、そして家族が増えた中で再会という絶妙なテーマが丁寧に描かれ、観る側の記憶や感情に静かに寄り添う作品でした。映像のクオリティが高いだけでは到達出来ない、登場人物へのまなざしや、伝えたい想いの強さが、人の心を動かす大きな力になるということを、改めて感じさせていただきました。

本コンテストを通して、完成度だけでは測れない挑戦や、その人ならではの視点に多く出会ったことを嬉しく思います。このコンテストのために作品を制作し、勇気を持って届けてくださったすべての皆さんに、心からの拍手をお送りします。



平林 勇 様（映画監督）

まずは「しずおかショートフィルムコンテスト」の第一回目の開催、誠にありがとうございます。

一回目ということもあり、応募総数こそ限られてはいましたが、アマチュアの方々の熱い想いが結集した、密度の高い映像が集まったと思います。それを象徴する作品が、静岡大賞を受賞した『池田君とぼく』です。この作品は、手作り感の強いプロには出せない質感の作品なのですが、「事実」の強さで惹きつけられた作品です。観客は映像のクオリティにも惹きつけられますが、唯一無二の個人のストーリーにはそれを上回る魅力を感じます。まさに、アマチュアに限定して募集した「しずおかショートフィルムコンテスト」にふさわしい作品だと思いました。コンペ部門で市長賞を受賞した『高木博士の失敗作』は、ショートフィルムならではのアイデアを形にした一本です。フィクションとして完成されている作品です。他にも入賞された作品たちは、小さくとも光る一点があった作品が選ばれたと思います。

映像作品を作ることは人生を豊かにしてくれます。「しずおかショートフィルムコンテスト」に応募することをきっかけにして、もっともっと多くの人に映像作品を作って欲しいと思います。



ブルベス・ジェローム 様（映像作家・静岡文化芸術大学教授）

第1回しずおかショートフィルムコンテストの審査員を務めさせて頂いたことは、私にとって大変意義深い体験でした。作品を鑑賞する中で、人々が映像を創る喜びを感じ、また再発見していく静かな高揚感を感じました。特に驚いたことは、初めて動画に触れる中学生から、新テクノロジーを試していたら御高齢の制作者まで、参加者の年齢層の幅広さです。

上映作品は、経験や技術のレベルも実にさまざまでした。完成度の高い作品がある一方で、未熟さや不完全さを抱えながら模索する作品もありました。しかしながら、そうした素朴な作品の中にこそ、誠実さや正直さ、そして個人的な思いを共有しようとする勇気を感じられ、強く心を打たれました。実験的な試みと物語的な作品が並び、開かれた自由な空気が生まれていたことも大変印象的でした。

この第1回目のコンテストは初まりにすぎませんが、すでに温かく力強い精神を宿しています。静岡映画コンペティションが今後も成長し続け、世代を超えて多くの人が自由に創作し挑戦し、それぞれの声で物語を語る場であり続けることを心から願っております。